

新式文について

今日から新しい礼拝式文を2ヶ月試行します。「どんなものか?」と説明するより、「まずはやってみないと分からない」という事での試行です。やってみて、「何が変わるのか?」「なぜ変えるのか?」「変更箇所の意味は何か?」というギモンも出て来るでしょう。ここで、今までの式次第と新しい式次第をならべてみましょう。裏面は、この試みのねらいについて書いてみます。

前	奏	
招	詞	詩篇 145 篇 8~9 節
祈	禱	
* 賛	美	讃美歌 11 「天地に
* 主の	祈り	(週報裏面参照)
交	読	詩篇 51 篇 (15)
祈	禱	
* 賛	美	讃美歌 521 「イエ
聖	書	I ペテロ 1 章 3-9
説	教	「悲しまなければな 古川和男
* 賛	美	讃美歌 252 「主よ
献	金	
感謝	祈禱	
報	告	
* 使徒	信条	(週報裏面参照)
* 頌	栄	讃美歌 541 「父

前	奏	
I. 神の民の集い		
* 招	詞	詩篇 100 篇
* 祈	り	
* 賛	美	讃美歌 130 「喜べや」
* 主の	祈り	
罪の	告白	招き・祈り・沈黙
赦しの	確証	詩篇 32:1-2, I ペテロ 2
平和の	あいさつ	
* 賛	美	讃美歌 495 「イ
報	告	
II. みことばの宣教		
牧会	祈禱	
聖	書	マタイ伝 26 章
説	教	「これはわた
III. 主の聖晩餐 (応答・献身)		
* 賛	美	讃美歌 133 「
主の	聖晩餐	
ささげ	もの	
IV. 派遣		
* 信仰	告白	
* 賛	美	
* 派遣	・祝福	

② 礼拝の流れの意識:

パッと見て分かるように、礼拝にある「流れ」(構造・ストーリー)がより意識されるように、項目立てをしました。

I・「神の民の集い」 神が私たちが「礼拝の民」として招かれます。招かれた神の民は、神への賛美と、差し出された「赦し」を受け取り、一つ「神の民」として整えられます。

II・「みことばの宣教」 集められた礼拝の民は、神が語ってくださる言葉に聴きます。聖霊が私たちの心を照らして下さるよう「照明」を祈り、聖書と説教に聴きます。

III・交わり(主の聖晩餐) 御言葉を聴くのに続いて、私たちの応答があります。毎週の賛美・献金がそれですが、何よりもこの中心は「主の聖晩餐」です。神が私たちに、ご自身の食卓に招いてくださり、私たちはパンと杯を受け取り、応答します。聖餐をするのは月一度だとしても、「説教」に続くのは「応答・交わり」です。

IV・「祝福・派遣」 礼拝は、神の民を、この世界に送り出して終わります。私たちの受ける祝福は、他者の祝福となることでもあります。礼拝者は、会堂だけでなく、全世界・全生活が主なる神の祝福の場であると知って、出て行きます。主イエスが先立ってくださることに励まされ、御霊とともに、神の民として出て行くのです。

② 「罪の告白と赦し」の重視:

新しい項目として「罪の告白と赦しの宣言、平和の挨拶」が目立ちます。今までも、「私たちは罪を犯してきました」「お赦しください」との祈りは、多く捧げられてきました。それを礼拝の流れに位置づけたのです。イエス・キリストの十字架は私たちの罪のための犠牲であり、教会の信仰の土台は、十字架に死に、三日目によみがえられたイエス・キリストです。礼拝においても、この「罪の赦し」を明確に位置づけるのは、改革派・長老派の礼拝の伝統です。《罪の告白への招き→告白の祈り(共同)→沈黙(個人)→赦しの宣言のみことば→平和のあいさつ》という順番で、イエスの血が流され、罪が確かに赦されたことを、改めて受け止めます。「赦されていないから告白する」ではなく、「赦されているのに背負っている」から、告白するのです。心を静めてへりくだり、罪と悩みを主に告白して、重荷を下ろしましょう。そして、その贖いを「平和のあいさつ」で互いに贈り合います。

③ 祈りの礼拝:

「罪の告白」だけでなく、会衆全体で祈る礼拝です。前に映し出した「祈禱文」を一緒に唱和する部分や、静まって沈黙することで、会衆が積極的に礼拝に参加することが重視されています。会衆は「お客様」ではなく、「礼拝者」と理解するからこそです。「交読文」という文言は消えましたが、交読形式は増えています。「交読文」が、詩篇や聖書の祈りをともに読み上げて祈る「共同の祈り」であることを、受け止める「礼拝式文」です。聖書の祈りや、先人の残してくれた、すぐれた祈禱文を、ともに、声に出して祈る。それが、ひとりひとりにとっての、豊かな礼拝になることを願っています。

もちろん、お疲れの方や心の向かない方に、強制的な唱和を義務づけるものではありません。

より豊かな礼拝のために

小会では、礼拝における「祈り」について、長年話し合ってきました。礼拝での祈りの奉仕が偏り、負担になっていることをどうするか。月に2回の「祈りの時」を持ったり、「交読文」を文語文から現代語文に分かりやすく変えてきたりしてきました。

これは、鳴門キリスト教会だけでなく、長老教会や日本、世界中の諸教会が取り組んできた課題です。「礼拝をより豊かに」という試みは、20世紀の後半から強くなりました。礼拝が、参加者にとって理解でき、主体的に参加できるものとなるよう、「礼拝運動」がなされました。何よりも、聖書から「礼拝とは何か？」を考察し、みことばが示す豊かな礼拝の姿を発見してきました。それは「神が御自身の民と出会ってくださる」という本質と、「礼拝・教育・宣教・牧会」という四つの要素です。また、礼拝での用語も整えられ、讚美歌も「新しい歌」として整えられ続けています。

そのような礼拝運動の中で、長老教会も「礼拝指針」「礼拝式文」をまとめました。それを手がかりに、私たちの礼拝をより豊かにしたいと願います。既に夕拝は、基本的にこの形式で進めています。朝の礼拝は「主の聖晚餐」を行いますし、少人数の夕拝よりも、良い意味での「厳粛さ」を大事にしたものにしますが、主な特徴は変わりません。「みことばによって改革された教会は、みことばによって改革され続けなければならない」が、宗教改革のモットーです。

更に、教会の世界的な共通課題は、高齢化・多様化です。奉仕者不足、祈りの言葉が浮かびにくい、古い言葉が理解されない、「今までこうだったのだから」が通じない…そういう淋しさ・戸惑いを覚えて模索しています。変化には勇気や淋しさが伴います。それでも、集まる多様な礼拝者が、それぞれに理解して、主体的に豊かな礼拝を捧げ、恵みによって力づけられて、派遣されて行く礼拝の形を求めています。それも、礼拝式文に求められる要素になっています。

新しい試みをする時には「違い」が目に着きます。しかし「キホンは同じ」です。今までの式次第を引継ぎ繰り返すではありません。そして、これまでの伝統を踏まえつつ、さらに豊かにするために改訂を重ねるのです。いわば、通い慣れた道を、より安心して歩けるように「手すり」をつけるのです。礼拝をより豊かに。礼拝の民としてより育てられることを願っての試行です。

① とともに祈る

礼拝での「祈り」を一部の奉仕者だけでなく、全員で祈ります。祈りの奉仕を引き受けることが一部の人に偏り、負担になってきました。その軽減とともに、全体で祈るための方法です。詩篇の交読、祈禱文の唱和も、「主の祈り」と同様に、ともに祈ります。祈りの形には、各自が自由に言葉を創る「自由祈禱」と、既に出来た祈りの文章をなぞる「成文祈禱」とがあります。どちらも大事で、相補完的です。祈禱文に従って祈る事で、祈りを教えられ、普段の自由祈禱が豊かにされます。詩篇、聖書の祈り、先人たちの優れた祈禱文を、声に出して読むときに、主との交わりが豊かにされ、普段の祈りも豊かにされます。主は、主の民に、祈りを与え、教えてください。そのような面が強まった式次第です。

「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」そこでイエスは彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ、御名が聖なるものとされますように。御国が来ますように。… ルカ11：1、2

② わかる言葉

「主の祈り」は、文語文から「新改訳2017」の現代語訳にしています。長年、文語文で祈ってきている人には文語のリズムがしみついています。同時に、新しく教会に来る方、若い世代、これから増えていく外国人の来会者には、日常的でない言葉の「馴染めなさ」があることにも配慮したいところ。いつかは変える時が来るのを、この機会に味わうため、口語文を使用しています。

また、説教で触れたように、文語文では分からない（誤解されている）本来の意味も、新改訳2017では明確になっています。（「あがめさせたまえ」→「聖なるものとされますように」、「我らが救すごとく」→「お赦してください」、「罪」→「負い目」、など）

私は霊で祈り、知性でも祈りましょう。霊で賛美し、知性でも賛美しましょう。そうでないと、あなたが霊において賛美しても、初心者席に着いている人は、あなたの感謝について、どうしてアーメンと言えるでしょう。あなたが言っていることが分からないのですから。 Iコリント14：15、16

③ 静まる

「罪の告白の祈り」「牧会祈禱(とりなしの祈り)」「説教後の祈り」にあわせて、「沈黙」の時を持ちます。これも、今までの礼拝にあった「間」を意識することです。沈黙は、声に出さずに心で祈る「黙禱」とは違います。心の中でも、急いで言葉にしようと思わず、言葉にならない私たちの思いに、神と共に耳を傾けます。静まることで、自分の心配・重荷・願いが聞こえ、そのうめきを聴いてくださる主の前にある体験をします。

日常の「黙禱」は、私たちの私的な言葉をつぐませる強制性(自粛)の意味合いがありますが、聖書の「沈黙」はもっと積極的です。黙らせられるのではなく、魂の深みにおいて神と交わり、私たちの呻きをもっとしていただく主を信頼し、本心からの祈りを捧げる勇気をもって語り始めるための、積極的な「静まり」です。

震えわななけ。罪を犯すな。心の中で語り 床の上で静まれ。
詩篇4：4

同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。人間の心を探る方は、御霊の思いが何であるかを知っておられます。なぜなら、御霊は神のみこころにしたがって、聖徒たちのためにとりなしてくださるからです。 ローマ8：26、27

聖書箇所は、招詞が月ごとに、「罪の告白」の部分が月の週ごとに変更します。先に書いた通り、会衆が「礼拝の主体者」であることを大事にしたいと願っています。皆さんの中から、「この讚美歌が歌いたい」「この聖句を使って欲しい」、逆に「あまり変わると戸惑う・疲れる」という声も大歓迎です。(全部採用できるとは限りませんが)。この新しい試みが、礼拝の豊かさになる「手すり」であることを願っていますが、かえって「障害物」になるなら改善します。

二ヶ月試してみて、率直な感想、ご意見をぜひお寄せください。途中での質問も大歓迎です。遠慮なく牧師まで聴いてください。馴染みのない形式への試みを受け入れてくださる皆さんの寛容さに、心から感謝します。皆さんと一緒に礼拝できるこの上ない幸せを下さる恵みを下さった主を崇めつつ。

2020年3月14日 古川和男